

Ⅱ 横浜国際園芸博覧会具体化検討会の検討内容等

横浜国際園芸博覧会具体化検討会 委員名簿

(座長) 涌井 雅之	東京都市大学特別教授
賀来 宏和	千葉大学大学院園芸学研究科客員教授
岸井 隆幸	日本大学理工学部土木工学科特任教授
北川 フラム	アートディレクター
隈 研吾	東京大学特別教授・名誉教授
柴田 道夫	東京大学大学院農学生命科学研究科教授
保井 美樹	法政大学現代福祉学部・人間社会研究科教授
横張 真	東京大学大学院工学系研究科教授
和田 新也	一般社団法人日本造園建設業協会会長

本検討会の検討経緯

第1回 横浜国際園芸博覧会具体化検討会

日時：令和2年10月30日（金）13:30～15:30

場所：合同庁舎3号館6階都市局局議室

○議事

1. 横浜国際園芸博覧会に係る経緯及び具体化検討の論点
2. 横浜市における基本計画の検討状況
3. 意見交換

第2回 横浜国際園芸博覧会具体化検討会

日時：令和2年12月21日（月）10:00～12:00

場所：三田共用会議所 第4特別会議室

○議事

1. 横浜市における基本計画の検討状況
2. 意見交換

第3回 横浜国際園芸博覧会具体化検討会

日時：令和3年3月5日（金）15:00～17:00

場所：三田共用会議所 1階講堂

○議事

1. 横浜市における計画案の検討状況
2. 横浜国際園芸博覧会具体化検討会の報告書案について
3. 意見交換

第1回横浜国際園芸博覧会具体化検討会 発言概要

日時：令和2年10月30日（金）13:30～15:30

場所：合同庁舎3号館6階都市局議室

【テーマの具体化について】

- ・ 企業、個人、いろいろな単位のコミュニティが、最初から住むことも含めて関わるやり方ができないか。100ヘクタールある広い地域で、開催前からそこに新たなライフスタイルのモデルとして住んでもらい、緑や農の暮らしを自ら体験し、博覧会期間中にもその暮らしをオープンガーデン的に自ら語り部となり展示物として見てもらう、というような博覧会にできないか。
- ・ 感染症に関して、歴史を振り返ってもこのような脅威があるたび、一部の「持てる者」が富を手エクスクルーシブに生き残ることが明確化してしまった。それに対し、いかにインクルーシブな社会を形成するかが非常に大きなチャレンジ。『共』、『Co』というキーワードは、自然と人ということだけではなく、下手をするとどんどんと拡大してしまう格差を克服し、人と人との間の『共』をどうやって形成していくのかにも焦点を当てていくべき。
- ・ これまでの博覧会は常に最先端、最新技術と言ってきたが、そればかりでは「格差」はさらに広がるのではないか。足元を振り返ることも大切。
- ・ コロナの後の状況というのは、たくさんの人間に来てもらい展示をすることに対して、根本的な転換が図られる時代。シェアする技術というのはこの1年間で格段に変化した。ここでどうことが起こったか、どういう新しい生活がここで始まったかというコンテンツが一番重要。大都市の近くで里山的な自然環境が残っているこの場所は、コロナ後の新しい住み方、自然と人間との関係性を再定義するには、最も適した場所。生活が始まっていくというプロセス自身が非常にユニークなコンテンツ。万博とか花博というものの考え方自体をチェンジするものになり得る。
- ・ 昨年度の検討で、国が対応すべき博覧会というところまで来たが、印象として再び、横浜市の博覧会という感じがする。国としての開催意義をもう少し考えるべきではないか。決して後ろ向きの話ではなく、国としての開催意義如何によっては、テーマや意義の柱についても、さらに練ってもよいと考える。
- ・ 園芸博を開催することで声援を送るべき相手は一体誰なのか、主役は誰なのかということをもう少し詰めていくべき。横浜の園芸博をやることで、例えば、北海道の花を中心とする農業の生産者が元気になり、そして、ガーデンツーリズムの対象となる庭を管理している金沢の造園家が元気になる。そういうことの全国の活動の積み上げを世に伝え、広め、声援を送る場として、横浜を会場としてやるというのが園芸博ではないか。
- ・ もっと国の根本的な農業問題を発信すべき。先進国でこれだけ食料自給率が低い国もない。食糧の安定供給や東京あるいは大都市に一極集中する中で残された農村をどうするのかなど、わが国の農業に関して国民と一緒に考えるきっかけが園芸博なのではないか。

- ・ 花の万博のときの準備当初段階の大きな失敗は直前の国際科学技術博覧会の予算・体制などの事業構造を参考にしたこと。国際園芸博覧会と万国博覧会では事業のなりたちが大きく異なる。花の万博では豊かな経済情勢でその後の軌道修正が可能であったが、現状の経済・財政下では途中での転換が不可能。愛・地球博、あるいは大阪・関西万博と同じ構造のミニ版をつくっては、この博覧会はいまうまくいかないと思われる。
- ・ 今、「農の心」というのが非常に大事。2050 年頃になると、食糧危機の問題が非常に明確に、国際的なテーマになってくる。その中で、日本は良い土壌条件を持ち、かつ、自然に手を入れその収穫物を楽しむという伝統と文化があったことを、日本人がもう一回見直すべき。農の心をどうやって心の中に涵養していくのか、全人類にとっても意味があるのではないか。
- ・ 農耕民族には、農業用水の分配など、繊細な配慮をしながら分け合う、シェアリングエコノミーの原型がある。農の心からスタートする伝統文化をしっかりと国際的に発信するというのは、非常に良いこと。
- ・ 愛・地球博の成功の要因の一つとして、10 万人ボランティアの存在があり、彼らが楽しくなり何回も繰り返して訪れた結果がああのような総人数的な人数に膨らんだ。心の中から楽しそうということ、を、まずバーチャルで受け止め、それをリアルに確かめるというような構図もあっていい。無理に、最大混雑時何人というような詰め込み方で博覧会の成功成否のメルクマールにしないでよいのではないか。
- ・ サブテーマに関しては『Co』というのは良い。世界の先進国の中で、本当の意味での産業としての農業が、空間的にも市街地と混在しながらいまだに息づいている国は、日本以外にない。その価値に一番気付いていないのは日本人であり、さらに言えば行政かもしれないと思う。既存手法でできなかった、しがらみの中で克服できなかったことを、あえてこの場で実験として行い、レガシーとしてつなげていくことが検討できないか。
- ・ 今、偏西風がものすごく荒れ始めており、ここは東京湾に面していて風の通り道となって大暴れする可能性があり得る場所。川の跡は要注意。川、地層、土壌の問題等は、くれぐれもよく検討していったほうが良い。
- ・ 新産業を創出するのは賛成だが、どの枠組みで価値を創造するのが大事。今、バイオミクリーという、生物や自然の構造に学び、化学反応を起こしたり、ものをつくるという考え方が重要で、生き残っていくために身につけてきた進化の知恵が産業になりやすい。生物由来の新産業とか、そういう一つの枠組みを作ったほうが良い。
- ・ 最初に物語を書くという方法もある。絵本を書いてみて、その主人公がどういう未来を欲しているかというストーリーを会場に落とし込んでいくという考え方。また、特定テーマに関するコンテンツでも、アートの力は大きい。アートのコンテンツができると非常に面白いものができる。
- ・ コロナ後に、「幸せ」の定義が変わらなければならない。豊かさというと、モノが多いとかいろいろ誤解を招くが、「幸せ」は未来に対して非常に有効な言葉。ただ、その定義は今までとは全然違わなければならず、その辺をうまく強調すると、アピールできるテーマがつかれる。
- ・ デンマークという国は、産業革命を経験していない。その結果として、国土に満遍なく労働力

や頭脳が残った。例えば農村から生まれたレゴ、あるいは、B&O というステレオメーカー等。それが今に至って幸福度世界一といわれる国になった。そういう社会のあり方がこれからの幸せの話と結びつくのかと思う。

- ・ 確かに、工業化は全体ではなく部分的に自己超越するが、農という世界は、最初から最後まで全部自分で面倒を見ることになり、自己完結したユニット。
- ・ 農以前の狩猟採集にも非常に面白い部分がある。里山の中にも狩猟採集的な部分があるので、レンジを広げて農を考えると面白い。
- ・ 心のプロセスは大事であり、どういう心持ちでライフスタイルを築いていくのかは重要な課題。その辺りが上手に表現できると良い。
- ・ 横浜市からであればこそその色を持って、日本国として世界に発信するという非常に重要な使命があるが、その重要なプロセスを経た結果生まれるのがレガシー。最初からレガシーを考えていくのは、土地利用ではあり得ても、こういうものをつくるから、こういう博覧会にするというアプローチは避けてほしい。この博覧会で世界に対して発信するという崇高な行為を優先してもらいたい。
- ・ 横浜園芸博を契機として産業界の発展に結び付くようなコンクールの開催を重視したほうが良い。ジャパンフラワーフェスティバルが、今途絶えてしまったという実態があり、その原因は、人集めを目的にした一般向けの単なるフェスティバルとなり、実際の商品生産や売買などの商談に発展しないなど、花き業界へのフィードバックが少なかったため。現在、種苗会社が生産者、市場関係者と実施している催しのようなビジネスに直結する工夫が必要。
- ・ 花き分野で世界に発信しうる具体的なコンテンツのイメージとして、例えば次のようなものがある。1) 遺伝子組み換えによる青い花の開発、2) 日持ち性に優れる品種の開発、3) 温暖化に対応し、夏期の会場で活用でき、アジアへの普及も期待される新品種の活用。

以上

第2回横浜国際園芸博覧会具体化検討会 発言概要

日時：令和2年12月21日（月）10:00～12:00

場所：三田共用会議所 第4特別会議室

- ・ 計画のコンセプトについて、箱庭的なイベントで終了させるのではなく、山下公園や三溪園などの周辺区域と連携することが必要と考える。開催地は横浜の市街化調整区域であるが、この地で開催する横浜市にとっての意義、またその波及効果を考え、博覧会実施後に何を獲得するのか戦略的に組み立てていく必要があるのではないかと。
- ・ 会場へのアクセスについて、コロナの影響でモビリティ利用も変化した。来場者交通の需要予測が必要と考える。新規交通システムの検討を先行して行うとよいのではないかと。将来的に交通システムをレガシーとして利用するのであれば、途中駅の設置や、接続も考える必要がある。将来的なプランも見通しながら計画を練ることが必要。
- ・ 南町田からの来場者が多いと考えており、国が音頭を取ってやらないといけないが、瀬谷駅だけでなく南町田の駅との連携が重要であり、都市的エネルギーが感じられるものがあるべきだし、それを演出することが必要。
- ・ 前回、大阪・関西万博が最後の博覧会ではないかという委員の意見があったが、今回の資料をみると、花と緑とグリーンインフラに関する記述を除くと、大阪・関西万博と酷似しているように見えるのが気になる。また、横文字、カタカナが多すぎる印象。大阪花博の基本理念と基本方針には横文字・カタカナの記述はひとつもない。
- ・ 参加者が重要であると記載があり、その通りであるが、AIPHの規則をみると、花・緑の園芸・造園の出展参加者に対して、補償措置あるいは賞金のどちらかを提供するのが特色になっている。大阪花博の時と異なり経済状況も非常に厳しい。園芸博では元々出展関係の費用を事業予算上十分に配分しておくことが重要であるが、横浜でやるのであれば、出展関係の事業費として、出展勧奨関係の事務局費用や出展参加を行う生産者や造園会社などの支援のための援助金をかなり大きな金額で用意するような事業構造にしないと園芸博が成り立たないのではないかと。特に、生産者は家業で日々の生産にも従事しており、無償では参加が困難であろう。
- ・ 会場計画と公園整備については実現性の観点から危惧している。再度、万国博覧会と国際園芸博覧会の事業構造をよく確認する必要がある。もし、1500万人が来場する園芸博を開催するのであれば、75～100haの公園を100%完成させるつもりがなければ実現は難しい。仮設が半分以上ある計画では実現不可能である。愛・地球博は時間が無くなったため、面的なインフラがある青少年公園でやらざるを得なかった。園芸博覧会では公園の整備が特に重要である。それが無い大阪・関西万博は建設費が膨らんでいる。建設費用が高騰しているのも要因の1つだが、インフラが入っていないのが大きな要因である。園芸博では公園をどこまで整備できるかが重要である。

- ・ 来場者目標について、規模的には感覚として 1000 万人くらいではないかと考えた。1500 万人の来場者を見込むのであれば、パーク・アンド・ライド・システムを導入する必要があると思うが、100 億円単位で資金が必要になるのではないか。駐車場を借り上げる必要があるため、かなりの費用が積み上がると考える。
- ・ 公園整備、来場者目標、会場整備を合わせた事業構造について、資料では愛知万博や大阪・関西万博だけでなく、淡路花博や浜名湖花博、その他園芸博覧会を参考に検討、と書かれているが、これは逆で、万博を参考にするのではなく、AIPH と BIE が重なる花の万博の園芸博の部分に加えて、淡路花博や浜名湖花博を参考に園芸博としての先催の事業構造例をよく確認して、国が開催するレベルにするという事業構造の検討が必要。園芸博覧会をベースに考えなければならない。
- ・ 結論として、来場者 1500 万人を目標とするのであれば、園芸博にふさわしい、国が補助をするに足る公園を 100ha くらい準備しないと、実現は難しい。また、農水・国交省もどのくらい予算を出すことができるのか、算定しておくべき。BIE の登録、閣議了解を多少遅らせてもちゃんと検討しないと園芸博の成功は難しい。
- ・ コンクールの質を上げれば上げるほど、また来場したい方が増えれば増えるほど、園芸博の成果に関わってくるため、ブランド化する、質を上げることが重要。AIPH に提案しながらやっていくのが良い。世界各国への発信にもつながり、ブランド化されたコンクールになる。
- ・ 大阪・関西万博(2025 年)の開催を踏まえて、関係性やストーリーを汲んでいるということが重要。「いのち輝く未来社会のデザイン」という共有し得るコンセプトの中でやっているの、そこを深掘りしてやっていくと、良い BIE へのプレゼンとなるのではないかと。
- ・ 全体を通じてグリーンインフラ等の「実装」がキーワードとなる。グリーンの切り口から、いかにして実装するか、実装するとどうなるかを見せることを、関西万博を受け継いで緑の観点から提案するのがこの園芸博覧会ではないか。最初から人に住んでもらうといった、画期的な案があったが、これを実現するためには法的な整備も含めると事前準備が必要となるため、早期に具体的な実装プランを提示していただきたい。
- ・ 機運の醸成という部分では、コロナ禍で Face to Face のコミュニケーションの実施が難しい中で、どう乗り越えるのか、何かアイディアを出していただきたい。
- ・ 園芸博が従来と変わって見えるために有効なアプローチは、作法が違って見えるようにしなければならない。作風が変わって見えることが求められる
- ・ この場所が将来、横浜市あるいは国にとって、どのような意義・コンセプトを表した場所であるのか、構成を考えていくことが大切である。日本の農業や日本の地域が壊滅的であるという状況を踏まえ、さらに都市の均質化・集中化が進む中で、この場所がどのような役割を持つべきなのかを考えなければならない。
- ・ 将来的に人が住む場所や、農業を営むコミュニティなどを想定した目標が今から設定されなければ、イベントをやっているだけだろうと思われてしまうように思う。
- ・ ビレッジという呼称を使っているが、本当に将来につながるようなビレッジを作っていたら

い。そのためには保健所、学校、公民館、集会所等のコミュニティのインフラが含まれている計画でないといけない。そのような観点は予算には入っていないが、次年度以降、どのように行っていくかということが書かれていないといけない。

- ・ 地方自治体の公共施設は予算制約が厳しく、ほとんどの公共施設は身動きできなくなっている状況の中で、地域との関わり方について十分考慮すべき。企業以外に、NPO や農業のための移住を考えている個人など縦横斜めの、地域の構成要員に対して声をかけていかないと、結局計画後にうまくいかないのではないか、そこが重要。
- ・ 世界に向けて声をかける上では見識が必要となる。例えば、世界銀行が投資したスリランカ東部と日本の香川県は乾燥地のため池という部分に共通点がある。スリランカに立ち寄り灌漑設備を学んだ中国の僧の書物から灌漑設備を学んだ空海が溜池を満濃池に持ってくるなど、グローバルな歴史的な流れを計画に入れなければいけない。経済的なグローバルではなく、歴史的なグローバルをちゃんと考えないといけない。
- ・ この地域の元々の農業や灌漑など、少しでも歴史的な背景が伝わるような積み上げを今からはじめていかないと、この場所としての歴史性がなくなる。
- ・ 前述の活動を含めて、来年からの取組を示すこと。その取組自体が広報になる。マスコミによる広報よりも、口コミで伝わっていく作風が重要であることを申しあげておきたい。
- ・ また、資料にはエンターテインメントとアートが並立して書かれているが、アートはコミュニケーションの手立てであり、エンターテインメントとアートは違う。
- ・ レガシーという言葉にかなり違和感がある。レガシーというと、あくまで博覧会があって、その後何を残すのかという発想。主が博覧会でその後がレガシーという考え方だと思うが、この博覧会は、後が先にあるもの。市街化調整地域、周囲に市街化地域が広がる上瀬谷が、将来の横浜あるいは日本にとってどういった意義をもつ街として提示されるのかということが先にあって、そのイメージの前段階として、博覧会を考えるというのがあるべき姿ではないかと考える。リバースレガシーといってよいのかもしれないが、そのような発想が必要ではないか。
- ・ 博覧会開催後の街について、何をキーに考えればよいか。いうまでもなくグリーンが発想の原点ではあるが、但し、緑だ、園芸だ、農地だ、だけにとどまらないものを目指したい。
- ・ コロナ禍の影響で、急速に社会に浸透したICT、在宅勤務などを織り込んだ街を考えていく必要がある。これまでの社会は、人が様々な労働力、情報を持っており、情報を持っている人が動いて、ある場所で労働力、情報を提供していたが、これからの社会は、人が移動せずに労働力や情報を発揮するといった社会になるのではないかと。ある地域に様々な情報や労働力を持った人がとどまって、ヘテロな状態でその地域がそうした人々で構成されるような社会ができることが想定される。
- ・ これまでの社会は、用途地域がそうであるとおりに、個々の土地は純化していった、純化された土地がモザイク状に構成されることによって、都市全体として必要な機能や役割が満たされるという形でつくられてきたことに対して、将来は、個々の状態がヘテロな状態になっていくことを前提としてどのような街をつくっていくのか、そういう問いかけになっていく。その街の姿を

博覧会の前倒しのものとしてどう考えていくのかが必要。

- ・ グリーンインフラとは、素材としての緑や植物、緑地、農地からできているインフラではなく、グリーンという思想や発想から作られたインフラのことをいうと考えている。素材としてはグレー（コンクリートやアスファルト）でも構わない。設計図をつくり、完成形をつくり、竣工後にメンテナンスをしてなるべく劣化を防ぎながら維持するといったことがグレーからの発想とするならば、グリーンからの発想とは、常に状況に応じて作り変え、修正するようなことをし続けていくという発想。よって完成形もなければ、メンテナンスという概念もないということになる。端的な例は盆栽。広く言えば農業、里山といったものが挙げられる。
- ・ 上記に示した発想でグレーも含めて、街、インフラをどう作るかがグリーンインフラの究極の姿であり、それと ICT を前提とした新しい暮らしをどうデザインするかをベースに博覧会の後の街をどのようにデザインするかを詰め、リバーズレガシーとして博覧会を考えるという手順が必要。
- ・ 村という発想は、農・地域等のコンセプトを感じさせやすい重要な言葉だと考える。懐古的に里山に行くのではなく、未来の里山という概念を提示できれば良い。
- ・ ゾーニングについて、1500 万人という規模の来場者で、村を感じさせることは難しいと感じる。ICT で体験を共有する手段は色々あるので、それらを活用して会場に来る人間を絞ることも検討の余地があるのではないか。
- ・ パーク・アンド・ライド・システムについて、環境をテーマにした博覧会に車で来場させ、また莫大な資金をかけることはコンセプトとして違和感がある。
- ・ 体験を共有するという点では、アートはコミュニケーションの一種であり、コミュニケーションテクノロジーとしてのアートについて、様々な手法を試しているアーティストたちの世界を巻き込むべき。ただの広報やただの体験では伝わらない時代であり、全面的にアートの手法を使うのが重要ではないか。
- ・ 会場計画について、動線で中央に大きな道が引かれているが、この構図では村を感じることは難しい。大型バスなど、従来の交通手段を前提として作られているように見える。会場の全体の姿がどうやったら村に見えるかは道の問題と、地形の問題も大きいと思う。里山独特の微地形が今の会場計画にはそれほど感じられない。微地形は水系とも一体となっているのでその辺りも考慮してほしい。
- ・ 人を住まわせるというのは話題としてかなり面白い。未来の里山の生活が既に開始されていて、それが進化しながら博覧会になっていく、といった時間軸があると今までの博覧会と違った印象になるのではないか。
- ・ 生物を扱う点で、大阪・関西万博と園芸博は異なっていると思う。前回検討会では“農”の心というコンセプトについて議論が及んだが、農業分野においても農業の在り方についての捉え方が変容している。これまでは生産性重視であったが、現在は持続的な生態系サービスと調和させることが重要視されており、農業だけでなく社会の在り方にも目が向けられている。今回の園芸博でも SDGs などの持続的な在り方に関する視点は欠かせない。

- ・ 過去の国際園芸博がこれまで起こしてきたイベント後の経済効果は非常に大きいと考えている。大阪花博開催後、バブルがはじけ他の農産物が生産額を落とす中、花きだけは例外的に花博開催後 8 年程度生産額は上昇した。大阪花博の大規模な展示「花の谷」や、浜名湖花博の百華園という四季折々の花の展示など、四季を持つ日本ならではの展示があり、花きのアピールに大きな効果があったのではないかと。今回の園芸博覧会でも、博覧会後の経済効果が得られるようなものを目指してほしい。
- ・ 経済効果だけでなく、花と緑にはストレス緩和の効果など様々な機能があり、社会にとってもこの博覧会は資するものと思う。農業や花・緑の機能に関する多面的な観点をもって、取り組んでいていただきたい。
- ・ 前回、大阪花博と本博覧会は全く異なるものであるべきだと述べた。これまで、フォアキャストの観点で世界は進行してきたが、現在は生態系サービス、自然のリソースの限界からバックキャストして考えていかなければならないと考えている。EU が各国の基金から、コロナを前提とした新たな時代に向けた取組であるグリーンリカバリーに向けて動いている。パンデミックが社会を変容させるという時代認識であり、新たな時代の想定が必要であると認識しているように思われる。地球は Garden そのものであり、Garden の原義、“囲まれた楽園”を実感し・その価値に体感的に目覚めるという原体験を得ることがこの博覧会で重要なコンセプトであるとする。このコンセプトは、関西万博とは全く異なる、バックキャストの発想から得られるものである。「人は自然の全体なり。故に自然を知らざる則は吾が身神の生死を知らず、生死を知らざる則は自然の人に非ず。人に非ずして、生きて何をか為さんや」という安藤昌益の言葉にある通りの状況に我々はまさに置かれており、この体感を得ることが本博覧会のコンセプトではないか。
- ・ この計画の中では、体感というコンセプトが十分に表現されていないのではないかと。GAFA の本社が植物公園のようなデザインを行っているが、DX が進むほど、リアルな体験へのアプローチが重要になっていくのではないかと考える。Covid-19 の影響下で大規模な行動変容が起こっており、改めてリアルな体験へのアプローチの重要性に目が向けられるのではないかと。自然からの学びについて、昨今改めて注目が集まっている。ワクチンや山形の鶴岡で慶應大学のベンチャーが蜘蛛の糸の製造に成功した例など、近年ではバイオミミックの概念も浸透してきている。本博覧会でも、改めて自然から学ぶことは多くある、生態系サービスを大事にしていこう、ということをポジティブに発信していくのがよいのではないかと。
- ・ ビレッジというコンセプトについて、地域文化をそのまま再現した国交省の国営公園などにも学ぶべき点が見えるかと考える。様々な形で、バックキャストの発想で生態系サービスの重要性、楽しさを訴えていかなければならず、またその楽しさが“幸せ”につながるのではないかと。
- ・ 大阪・関西万博と言葉が共通しすぎているように思う。また、具体性が不足している。“ビレッジ”や“共創”など、具体的には何を指しており、どのように実現するのか。この地域の特性が、最大のインフラであるので、今後の利活用の観点にも言及いただきたい。

- ・ 園場に関する言及をすべき。近隣の優良農地と可能であれば組合をおこし、施設園芸を公的に補助しながら整備をし、保全園場としていくことも可能性としては考えられるのではないか。
- ・ 来場者を 1500 万人とした考え方についても、それが事業収支の視点で考えるのか、会場にその位来ていただいて啓発することを目的とするのか、その基準についてもしっかりと示していくべき。
- ・ 欧州の国際園芸博は、近年の傾向として、都市環境に焦点が当たっていると言われるが、それは戦後の園芸博覧会が始まった頃からすでに行っており、目新しいことではない。実は華々しい園芸博覧会の表の世界の裏側には欧米の植物資源戦略がある。アジアでも、中国では、1999 年の昆明園芸博以後、漢方に利用する植物をみだりに国外に出さなくなった。中国では、国の政策として、植物の収集保存関連の費用や労力を国として増やしている。例えば、日本では柑橘類について世界一の遺伝資源を持っているが、それを将来保全できるのかという危惧がある。しきれていないという実態がある。皇居東御苑では、現在の上皇陛下が天皇陛下の時代の思し召しにより、柑橘系の古品種が集められ、自ら御手植えもされているが、来園者の観賞のためだけでなく、古来人が関わった遺伝資源を大切にすべきというメッセージではないか。横浜の園芸博覧会で、そのような資源の観点でも来場者に訴求していただきたい。
- ・ 江戸の下町は非常に人口密度の高い地域にも関わらず、世界に冠たる園芸文化を生み出し、世界の品種改良においても極めて貴重なリソースとなってきたという実績がある。世界への発信に横浜が寄与したというバックグラウンドも含めて、アピールしていくとよいのではないか。
- ・ 生命の根源である植物が存在するという価値の大きさ、そんな文明観でものを考えていかなければいけない時代が来たという共感を、農の心として、表現できる園芸博覧会にしてほしい。

以上

第3回横浜国際園芸博覧会具体化検討会 発言概要

日時：令和3年3月5日（金）15:00～17:00

場所：三田共用会議所 1階講堂

- ・ 詰まっている部分もあるが、具体的に詰まっているかという点、残念ながら3回目にしては不十分。地域の方、産業界の方にとって、自分たちが何を貢献していこうかというのが見えないと、盛り上がりには欠けると推察される。今後、BIEやAIPHに対し、現場で具体的にどう進んでいるのかを、しっかり見せていく必要がある。
- ・ 主催者展示では、ある程度具体的なものが出てきているが、気になるのが遺伝子組換え。あまりにこちらに振ると、全体の趣旨と違うことになる。
- ・ 産業振興の側面が弱い。園芸博覧会は、緑産業の振興という側面もあり、フロリアード・フェンローでは、ビジネスミーティング等を継続してやっている。地域の方々に、日本の緑産業の方々に、早くどういうものを作って欲しいのか、海外に向けて日本国としてどういうことをやって欲しいのかを示せば、具体的に動くと思う。
- ・ コンペティションに関し、園芸博の強みは6か月やることであり、花壇の長期化コンテスト等は是非やって欲しい。国際展示でありヨーロッパ各国は、しっかり見せてくれるけれども、開発途上国や東南アジア諸国は良いポテンシャルを持ちながら、表現されていない。それを引き出されるような園芸博になれば良い。
- ・ 事業費がかなり厳しいのでは。実行的な予算にする必要がある。園芸博は、会場整備に時間がかかるもの。花博や、淡路花博、浜名湖等のスケジュールを確認いただきたい。
- ・ 入場者について、有料入場者1000万人とあるが、経験からすると、この会場の場合、総入場者数から見てパークアンドライドやシャトルバス等が必要で、100億円程度必要。仮に、駅からのシャトルバス事業を交通事業者の自主事業にしても、交通事業者が赤字が出た場合などの費用補填を覚悟しておく必要があり、その分をすべて外部予算とするわけには行かない。また、駐車場借り上げや、新交通等も含めて、交通対策の妥当性については岸井委員に見て頂きたい。
- ・ 有料1000万人と言いつつ、資料では1日上限の平日・休日の人数を積み上げると1000万人となり、総入場者数は1000万人ということになる。その場合、有料入場者数はそれを下回ると見込まれるので、その検証をお願いしたい。
- ・ 個別の事業の検討を進めるに当たっては、農業・園芸・造園の学識者に入ってもらい、専門領域で検討いただく必要がある。また、例えば、これだけ多くの品種を集めたなど、市民の皆さん、産業界の皆さんにわかりやすいように。
- ・ コンテストは元々屋内外の出展参加者が自らルールを決めて競技を行うものであり、この段階で主催予定者が深める必要はない。細かいが、「古典園芸植物」という用語は、「伝統園芸植物」に変えていただきたい。

- ・ 国が関わる意義として、会場と事業構造、運営費について曖昧にしたまま進むと、大阪のように途中で会場建設費が 600 億円増えるということになる。会場もピン止めされておらず、両省、横浜市を含めて、財政状況をふまえながら、園芸博覧会の本質を外すことなく、現実的な事業構造をつくってほしい。
- ・ 経済団体の支援は非常に大事だが、浜名湖花博は 6 年前からボランティアリーダースクールをやっていた。ボランティアということで、会期中の運営のお手伝いという印象があるが、そうではなく、出展参加を中心に、園芸博覧会に関わる多方面の園芸・造園産業関係者、緑化活動者など、いろんな方が入って機運を盛り上げ、参加を醸成した。このような園芸博覧会としての本質的なやりかたを是非考えていただきたい。
- ・ 「花の万博」では、「自然と人間との共生」がテーマであったが、今回の園芸博覧会では、開催理念として、「共生（きょうせい）」から「共生（ともうみ）」という理念はどうかと考える。国が開催する園芸博覧会とするならば、さらに両省でこのような環境下で開催する意義、これからの日本や日本人の立ち位置につながる哲学、理念を盛り込んでいただきたい。
- ・ 報告書について文言の上では問題ないが、園芸、農業についてどう貢献できるか、というと、資料 6－2 の 15 ページ、花卉園芸の農業に関する新たな価値創造に向けた産業創出が、具体的に何なのかが見えない。また、例えばひたち海浜公園のネモフィラの丘のように、園芸博ということで大きな展示をやると観光的な大きな価値を生むかもしれない。コロナ禍に対応し、リアルとバーチャルをうまく組み合わせてどう展示していくのか、新しい IT の活用ができるのではないか。
- ・ スマート農業に関し、アルメーレ園芸博でも論議されている。オランダの施設園芸はトップを走っているが、さらに発展するにはどうしていくのか、日本の農業がどう発展していくのかを示すことが期待されている。展示する材料について、模擬的な生産を見学の場所として見せていくのは意味があるのではないか。
- ・ 横浜、神奈川は、明治に入って海外との取引の歴史があり、花きが輸出され、日本の園芸の発祥の地となった。横浜植木、サカタのタネがいろんな品種を作って海外に輸出してきた。そのような展示、地元の産業振興を具体的に書いて良いのではないか。
- ・ 会場計画のイメージがまだ持てない。花博でも建築が印象を決めていく部分がある。木で作るのをルールにするとかできないか。ゼロカーボンをさらに踏み込んで、木も地元産とする。15km 以内の木しか使わない等も考えられる。建築や構造物でもわかりやすく、ゼロカーボンの道を示せると、具体のイメージが湧くのでは。フェンス・塀も、本質的なものにしていくと、見た目の印象が全然かわってくる。
- ・ 横浜市の会場計画について、テーマ、サブテーマと事業コンセプトが 6 つあって、ビレッジとあるが、直接繋がっていなくて関係がととてもわかりづらい。ビレッジの 6 つが、サブテーマの上にある「幸せを創る明日の風景」に繋がると説明してもらった方がわかりやすい。表現をわかりやすくして欲しい。

- ・ それぞれのビレッジでやることを、会場全体でも貫徹する必要があるのでは。ビレッジで国際交流とか書いてあるが、世界に展開することについては書いていない。ゼロエミッションの話はビレッジだけでなく、園芸博全体のプロセスで、それに近いことをやらないといけない。
- ・ コロナを 1 年以上経験し、社会が抜本的に変わろうとしているときに、果たしてこういう博覧会が社会の支持を受けるのかということについて、整理しないといけない。新しいライフスタイル・ワークスタイルが社会に急速に普及しようとしている中、ここに書いてある計画は、そうした社会の新しい動きと乖離しているのでは。
- ・ ビレッジとあるが、何をしたいのか。20 世紀はじめハワードは、田園都市論を展開する中で、都市と田園との結婚を提案したが、その先にある、新たな都市と農村の関係として、ビレッジを通じて何を提唱したいのか。新しいビジョンを提示すべき。
- ・ SDGs の Development を見直すということへの答えがないと、SDGs に対する答えにならない。現在の計画は、旧来の Development 概念の域を出ていない。
- ・ コロナで、差別や分断、格差が世界中で起こるのは間違いないが、そのような中、インクルーシブな社会をどうつくるか。人類共通の課題を盛り込み、そこをきちんと考えないと、本当の意味での世間の支持は得られないし、レガシーも残せない。ただの一時的なお祭り騒ぎに終わってしまう。
- ・ 瀬谷について勉強会をしてきたが、水の循環、風の通り道というあたりを押さえて、それをベースに敷いてほしい。それができれば、環境のことが一気通貫で分かりやすくなる。
- ・ どういう人たちが来るのか、コミュニティをどうつくるか。僕はそこに加わりたい。
- ・ 今の日本はいろんなことをやってきているが、そこに精神の火が無い、作風が無いことが問題。細かい作風でいろんなことを積み上げていけるのではないか、そこはまだこれから。
- ・ アートは作る段階から非常に良いコミュニケーションがとれる。その初動の段階から取り組んでいくことが重要。
- ・ 地球環境（生命圏）の持続性に対応するために人々のライフスタイルや社会構造の大変容を起さなければならないという共通認識に立脚すべき。そこに Covid-19 が我々を襲い、同時に 75 億の人々が行動変容を起こした事実はこのまでの世界史にはない。改めて、人間は生物であり、生命圏に存在する生態系の一部である、という認識にたたねばならない。
- ・ いわゆる技術礼賛の文明博は終わると思う。横浜は、次の価値観、つまり生命圏の重要性・生き物の視点からの博覧会、という新たな視点に立脚すべき。
- ・ 最近の BS 系の TV では、不思議と植物や緑が多いのが非常に示唆的であり、現代が象徴されていると思う。厳しい生存環境の中で知恵を総動員して遺伝子をつないでいることがデザインに表れている。

- ・ デジタル、つまりバーチャルな世界が広がれば広がるほど、リアルでシームレスな生き物の実態を意識せねばバランスが取れない。
- ・ 未来に対して今までのフォアキャストの発想ではなく、生命圏を意識し、その限界と可能性を可視化するバックキャストに立った博覧会を考えるべき。
- ・ 従来の博覧会は入場者数で成功・失敗を計ってきたが、そこも見直す必要がある。たとえば、この場に住んでもらうことが舞台・劇場であるとの発想で、その暮らしの姿をインタラクティブに SNS 等で世界に発信し、サブスクライブしたフォロワーの数を基準に考えるといったこととか、共感した ESG 投資家からの投資を集めるといった観点での発想があっても良い。
- ・ 東京タワーや大阪の太陽の塔のような目玉があると、それによって記憶を取り戻す。この博覧会は何をもって思い出すことになるのか。皆の心を捉えていくことが重要であり、そういう検討をして欲しい。
- ・ いただいた意見による修正は、座長に一任いただき、取りまとめ、各委員にコミュニケーションを取る作業をやっていききたい（了承）。

以上